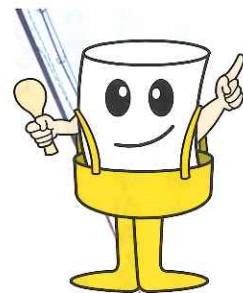


# 岐阜同朋 ふでうぼう

- 郡上教会の昔と今 ● 羽島に伝わる円空さん
- コラムしょうしんげ ● テレホン法話
- 一枚の寫眞の記憶 —のすたるじっく・ふおと—

2015.02 113



真宗大谷派 郡上教会

郡上市大和町名血部

## 一枚の寫眞の記憶 —のすたるじっく・ふおと—



郡上八幡防災センター(奥の建物)

写真は、1980(昭和55)年、郡上市八幡町内にあった頃の郡上教会です。1883(明治16)年郡上の説教所として建てられ、1998(平成10)年に郡上市大和町へ移転しました。八幡町内にあった当時は、地域の人達には便利がよく、さまざまな集會に使用され、遠方から通学・

通勤するための下宿先としても使用されており、高校生をはじめ年代の違う人達と生活をともにしていました。お風呂は無いので、近くの銭湯を利用していたそうです。時には、郡上おどりの観光客のためなどにも開放されていた事もありました。敷地内で、野菜や花等を作ったり、漬物

を漬けたりもしていたそうです。勿論、報恩講や葬儀等、僧俗一体となつて、地域の間法や、研修の道場としてその役割を果たし、地域の人達の拠り所となっていました。現在、その跡地には郡上八幡防災センターが建てられています。

昨年は大きな災害があつきました。中でも広島県の土砂災害や御岳山の噴火の大惨事は記憶に新しい所です。多くの方がけがをされ、命を落とされました。大きな心の傷を負った方もいらっしゃると思います。大切な方を突然亡くされた悲しみはどれほどのものなのでしょうか。

御岳山の噴火の中、小学生の女兒に自分のジャンパーを着せてあげていた青年の話をニュースで目にしました。残念ながらジャンパーを貸された方も亡くなられてしまいましたが、あのような大変な状況の中で最後まで他人を思いやるお気持ちに多くの方が感動されたのではないのでしょうか。私もその一人です。テレビの記者たちがその感動的エピソードへのコメントを取材していました。が、ジャンパーを貸された青年のご家族の方は、わが子が行ったすばらしい行動のことを素直に受け取るまでの心の余裕などあるはずもなく、ただただわが子を失った悲しみと無念さを語っておられたのが印象的でした。その時分と、この話を感動的な美談としてとらえ、悲しみをどこかへ追いやつてしまっている自分、他人事として本当に悲しむことなどできていない自分の姿が見えてきました。大きな災害などが起きない1年であつてほしいと願う一方で、その願いは、はたして、本物なのだろうかと思つています。

(徳)

編集後記



# 郡上教会の昔と今

郡上市大和町に、僧俗一体となって地域の聞法・研修の道場としての役割をはたしている「郡上教会」があります。郡上教会は、1883（明治16）年、郡上組（現在の13・14・15組）56ヶ寺の共同運営のもと、本山直属の説教所として郡上八幡町に開かれ、それから115年の歳月を経て、1998（平成10）年に大和町に移転されました。

今回はこの郡上教会の特命教会主管者代務者として長く職務を担ってこられた可児賢了氏（郡上市八幡町那比・福常寺前住職）より、郡上教会についてお話を聞きました。



**Q** 郡上教会はどうして生まれたのでしょうか？

**A** 当時（明治初期）、郡上の寺院は飛騨高山の照蓮寺との関係が強い寺も多く、そのため郡上教区にもなれず、中本山というものでできず、しかし郡上が一つとなつていくには、それらをまとめる場所と機能が必要だということで、郡上教会が建てられたようです。

そのような理由もあつて郡上八幡市街の真ん中に建てられたんですが、敷地の四分の一弱くらいを占める入り口の部分だけが本山名義の土地で、あとの残りの部分は郡上56ヶ寺がみんなで資金を出し合つて購入したんです。建てられた頃は説教所

**Q** 郡上教会は地域の人たちにとって、どのような存在だったのでしょうか？

**A** もともとは住職の勉強・聞法の間として生まれました。それまでも郡上にはえらい講師という人がおいでで、その御講師によるお話の場へ住職さんたちはいつも足を運び、熱心に耳を傾けていたんです。薫陶を受けたんです。郡上教会ができてからは、住職さんたち、つまりお坊さんたちが学習すると、説教を聴くという場であり、そしてさらに門徒さんたちも誘つて一緒に聴く、聞法の場をもにしたんです。だから今でいう教化センターのような役割を担っていたんです。

暁天講座をはじめとする法座では、講師はもちろん住職・門徒と呼んでおつたので、布教の中心やんな。きつとそんな場所やっつたやんな。そしてそのような所としてずっと受け継がれてきてきたんです。

**Q** 八幡町内から大和町へ移転したのはどんな理由があつたのでしょうか？

**A** 時代の流れとともに自動車普及してきて、な、駐車場がなかった郡上教会はだんだん不便を感じていたんです。だから「車で行きやすくして駐車場のある場所やないとみんなが集まれん。どっかに広い駐車場を持たない所がないやろう

か」と話題になつたところ、たまたまやんな、八幡町の方から「郡上教会がだいぶん古くなつて

おりますが、火災の管理上からいろいろな問題があります。そこでこの場所を八幡町の方で買い上げさせてもらえんか。その際、どうか他の地に移転するにあつては町としても協力させていただくので、そういうふうにしてもらえんか」という旨の声があり、こつちとしても「それはありがたい」という事で移転に踏み切つたんです。

移転先についてはいろいろと候補地をあげ検討を重ねた結果、広い敷地の確保が可能で、郡上のほぼ真ん中であるということ等、いろいろな面から最終的に大和町に決まつたんです。

## 郡上青少年教化センター

という名のもとに

当時から郡上3ヶ組では、八幡町の安養寺さんを会場にして長年にわたつて児童宿泊研修会をやつておつたやんな。郡上教



会の建設構想の中では、そんな研修会も開催できる所が必要やし、さらに郡上の地理的環境もふまえ、夏季にはキャンプ、冬季にはスキー等々、ベッド数50床という大勢の人を収容できる岐阜教区としての宿泊研修施設、「郡上青少年教化センター」を併設した施設建設の計画をやつたやんな。予算書もつけてその旨をご本山へ申し出たところ、本山は宗務所から参務をはじめ宗議会議員等々が現地へ視察において、前向きな姿勢をみせたん

やんな。そのような中で、とりあえず教会だけを建てたやんな。教会が建つた時点でも二次計画として教会裏側の広い敷地に青少年教化センターを建てる計画は生きておつたやんな。

しかしその後、どういう事なのか、わからんやけど、どういう事なのか、わからんやけど、中だから、今許可を出すわけにはいかん」と言われ、「それなら今後ここを候補に入れておいて欲しい」と伝えたんやが、その後本山の動きはなく、青少年教化センターは建てられることはなかったというわけなんです。

## 新しくなった

郡上教会について

新しい郡上教会を建てるといふことで、郡上中が一丸とな

り盛り上がっている感じがやっつたやんな。

1998（平成10）年の春に新しい教会が完成し、その年の秋に落慶法要を盛大に行つたんです。郡上の寺院はほとんどの住職が参詣し、岐阜教区からは教務所長、教区会議長、そして宗議会議員さん、門徒さんは各お寺から10人ずつくらいと、とにかく建物内に入りきれず、外にも大勢の人のお参りがある中で落慶法要をやつたやんな。その後、報恩講もやつたやけど、それはすごいお参りで満堂やつた。そのとき地元の人たちの意見で、報恩講は11月の最終土曜日と決めて、今でも変わることをなくずっと続けられています。

現在は郡上3ヶ組合同の報恩講、夏期講習、年2回の暁天講座が行われていますし、また坊守会、子どもの夏の宿泊研修、組会や組門徒会研修、お寺さんの学事の研鑽の場として活用され、郡上の教化活動の拠点となっているわけです。



# 羽島に伝わる円空さん



県内で唯一の東海道新幹線の駅がある羽島市内に入ると、あちこちに大小の仏像が立っているのが目に入ります。これは、羽島で生誕されたとされている円空さんに由来するもので、羽島市民の方々が円空仏を真似て思い思いに作られたものです。今号ではその円空さんのエピソードをご紹介します。

円空は、1632(寛永9)年の生誕から1695(元禄8)年の関の弥勒寺に入定するまで、その生涯は謎に包まれています。江戸時代前期の行脚僧であり、全国に「円空仏」と呼ばれる独特の作風を持った木彫りの仏像を残したことで知られています。

ノミとナタを手に全国各地を旅しながら、生涯におよそ12万體にも及ぶ仏像を彫ったと推定され、現在までに約5,350體発見されています。

円空仏は全国に所在し、北は北海道、青森、南は三重県、奈良県まで及び、多くは寺社、個人所蔵がほとんどであります。その中でも岐阜県、愛知県をはじめとする各地には木彫りの仏像が数多く残されています。



円空自筆とされる六字名号 (徳仁寺蔵)

円空自筆の名号が保存されていることから、円空の生誕地が「羽島市上中町中」であることがうかがえます。

円空仏の特徴として、デザインが簡素化されておりゴツゴツとした野性味に溢れながらも不可思議な微笑をたたえていることで知られ、一刀彫という独特の彫りが円空仏の個性を引き立てています。



徳仁寺(岐阜教区第8組)

羽島市上中町中

## これからの郡上教会は…

教会の維持・管理は郡上の3ヶ組で行っているんですね。夏の晴天講座は門徒さんや地元の人たちがたくさん来て、講堂に入りきれず、廊下や和室まで一杯になりますし、報恩講も120~130人のお参りがあつて、今でも地域の中で大切にされる施設となっています。



をかけ、春秋永代経会が勤まっておったんですが、移転されてからは勤まらなくなりました。しかしまた永代経会が始められたらいいなと思っておるんですね。小額でもいいから永代経懇志をお願いして、僧侶一つにまとり、みんなの心が自分たちの教会、という気持ちになるという一層興して思っておるんです。それに、建物の維持管理・修理も必要となつてきておるので、収入源の確保も喫緊の問題なんやけど、まあ大変なことでもありますからなあ。

本山とのつながりを大切に、維持していきたいと郡上の人は思っておるんやけど、この「おもい」が果たして本山に届いておるかと思を傾ける事があるんですね。末寺は教団を維持するためだけの末寺ではない。地方の末寺がどう活動するか、動くかということと連動していくことが、教団を一つにしていける作用なんだと思うんですがね…。

郡上教会は、古い歴史と郡上の願いが続いている。その願いはご本山の願いとつながっている。そしてそれが今の郡上教会となつている、そう私は思っております。

………

可児賢了氏は御自分の記憶をたどりたどりしながら、郡上教会の歴史を語って下さいました。それは同時に、郡上の真宗における僧俗の心の歴史でもあり、ねがいでもありました。長年にわたつて郡上教会を支え、そこに集

う寺族・門徒に心を寄せ、第一人者となつてその責務を担つてこられました。今は郡上教会の主管者代務者の立場を退いていらっしゃるんですが、郡上市内で、真宗門徒だけに限らず宗派を超えて、人々とともに聞法の場を開いていらっしゃる。

「郡上教会で御遠忌がやりたかった。しかし(自分が)歳をとりすぎて、もうできんなあ」と言われた笑顔の向こうに、真宗とともに生きてこられた大きな歩みを感じさせていただきました。



郡上教会報恩講

2014.11.29



# しょうしんげ

お寺の境内の掃除をしていた時、一緒に手がけていた門徒さんから「他力本願ではダメだよ。自分でやらなきゃ」とたしなめられたことがあります。また、学生の頃に、何かの役を決める時、「きつと誰かが手を挙げるから黙ってよ。面倒だし」と思った経験もあります。そんな時「他力って何だ？」とふと頭をよぎったものです。

う一句があります。  
**往還廻向由他力**  
(往・還の回向は他力に由る)  
仏の国へ往くのも、その国から還るのも自分の力ではなく、他力、すなわち仏の願いの力によつて振り向けられる、というほどの意味になります。親鸞聖人は、「他力」と言ふは、如来の本願なり」と、ここに聖人ご自身がアミダ如来の本願力によつて振り向けられ、真理に触れることができた飲びが込められ

ています。  
現代のような格差社会では、自分の努力や才能を振り絞り、がんばった成果として「勝ち組」という勲章が与えられているようですが、この世の中には、そんな人間の知恵や財力ではどうにもならないこともたくさんあるように思います。もちろん自分の力を信じて精一杯努力することとは大切ですが、それ以前に、いろんな縁によつて支えられ生かされているということも忘れないでおきたいものです。

顔で堤にやってきては、ぼろぼろと涙をこぼした。  
「つらかうになあ、ふびんなことよ」  
身よりのないのかわいそうに思った寺の住職が、声をかけてくれた。  
「わしの知り合いの尾張の寺が、小僧をさがしてある。どうじゃ、行ってみるかえ？」

尾張で五年間下働きをした後、太助は、生まれ故郷の住職の寺にもどった。そこで『円空』という名をもらって出家し、住職から本格的にお経や字を習った。その後、承応三年(1654年)23歳の春、円空はだれにも告げず、わらじのひもをきつく結んでふるさとの村を出た。

堀野慎吉氏の『円空』(その長い旅のはてに)より抜粋。

## 幼名・太助から円空へ

子どもの頃の名は「太助」、輪中の村は、川より低い。そのうえ幕府の命令で、『美濃の国の堤は、むこう岸の尾張が三つ、より三尺低くせよ』とのきびしいおふれがあった。そのため大雨がふると、たびたび堤がきれた。あかにごりの水が田んぼや畑、家までものみこんで、村をどろ海にしてあばれた。

太助が七歳の時、とてつもない『大コウ水』が、村をおそった。その日は、水のように知らせるひのみやぐらの鐘が、朝からひっきりなしに鳴り続けた。黒雲におおわれた空から、横なぐりの雨と風がたたきつけていたが、昼をすぎた頃、ふつりと止んだ。  
「おまえは、ここで待つとるんやぞ。すぐにもどってくるでな」  
太助と着のみのまま、いったんは命塚と呼ばれる高台に避難したおつ母あ

は、どろ水をけちらして再び家へと、きびすをかえした。  
床の上まで水がついた家の中から、とりあえず煮炊きに必要なナベやヤカン、を、しよいかごにぶちこんだ。戸口のつかい棒を杖がわりにして帰るとちゅう、高台の目と鼻の先で鉄砲水があつという間におつ母あをおそった。

「おつ母あ!! おつ母あー!!」  
太助は、のどがつぶれるほどに、おつ母あを呼んだ。押し倒され火死にもがいていたおつ母あは、とうとう渦の中に引きこまれ、それっきり帰らぬ人となった。  
太助は、ひとりぼっちになった。  
「水が…水が…、おつ母あ!! おつ母あ!!」  
おぼれる時のおつ母あを夢を見て、太助は毎晩のようにおぼえた。  
昼間は、けぼーつとふぬけのような



中観音堂(羽島円空資料館) 羽島市上中町中526 TEL.058-398-6264



正面のお堂に入ると、本尊である高さ222cmの十一面観音像がそびえ立ち、その両脇を固めるように17体の円空仏群が並び立っています。お堂の東側に建つ資料館には、全国各地から寄せられた多数の仏像が陳列され、その迫力に圧倒されるとともに、行脚僧としての円空の足跡が偲ばれます。  
中観音堂のみならず、羽島市内にはあちらこちらに仏像が立っており、様々な表情をした仏さまを見比べながら歩いてみるのも面白いかもしれませんね。皆さんも一度訪れてみてはいかがでしょうか?

**テレホン法話**  
058-265-0033

「こちらは、岐阜教区テレホン法話です」とはじまる、受話器の向こうからの声。岐阜教区教化事業の一環である、テレホン法話の第一声です。テレホン法話はいつでも、どこでも聴聞できる電話による三分間の法話です。  
15日毎に、岐阜教区内の住職、坊主、若手僧侶等が、法話を担当しています。  
今では、岐阜別院ホームページを開くと、テレホン法話を文字として目にすることもできます。法話を文字で見ると、わかりやすい部分もあることでしょ